

## 【書評】

Edward Baring, *The Young Derrida and French Philosophy, 1945-1968*  
(Cambridge University Press, 2011)

櫻田裕紀

本書の読了とともに、デリダの「不忠実な忠実 (fidélité infidèle)」という言葉がふと思い出された。人が何かを受け継ぐとき、それが物質的なものであれ知的なものであれ、われわれは受け継ぐ当の対象に不可避免的に手を付け＝傷つけ (entamer)、もはや取り返しのつかない仕方でそれを変異・変様させることによってしか、過去の遺産を「相続」することができない。いわば何かを手元 (main) に保ち (tenir)、現在 (maintenant) のもとに維持 (maintenir) し続けようとする営みには、つねにこの還元不可能な接触、汚染、ないしは裏切りや損失の可能性が憑いてまわる——デリダは初期から一貫して同種のメカニズムを、狭義には現象学や存在論、あるいは精神分析や文学理論など様々なテキストから導き出しているが、そもそも彼の徹底した「読解 (lecture)」に基づく哲学のスタイルそれ自体、過去からの郵便物としてのテキストをいかに受け取り、再 - 書き込み (r-écriture) をし、いかなる署名で連署する＝署名に背く (contre-signer) のかを自ら実践して見せるという意味では、つねにこの「(不) 忠実さ」の問いと切り離しえないものだったと言える。

この意味で、本書『若きデリダとフランス哲学 (1945-1968)』は、まさしく「デリダを読むこと」の「忠実さ」(ないしはそれが根源的にはらむ「不忠実さ」) をめぐって、従来の研究に一つの挑戦を試みる意欲的な著作である。

本書は、現在プリンストン大学の准教授であり、20 世紀のフランス哲学およびそのキリスト教思想との関係を専門とするエドワード・ベアリングによる、デリダ思想の発展史的研究である。表題には「1945-1968」という限定が付いているように、本書が扱う対象は、デリダがアルジェリアのリセを出てパリの <sup>エコール・ノルマル・シュペリウール</sup> 高等師範学校 に入学し、その後ソルボンヌ大学での助手を経て、再び高等師範学校に戻り講師として教えるようになるまでの 23 年間に書かれたテキスト群であり、研究区分としては概ね「初期思想」を扱うものである。もっとも、この主題の選択それ自体はけっして新しいものではない。1990 年に修士論文の『フッサール哲学における発生の問題』(以下、『発生の問題』) が出版されると、いわゆる 67 年の三部作 (『声と現象』、『グラマトロジーについて』、『エクリチュールと差異』) に象徴される「脱構築の哲学者デリダ」という位置づけに対し、むしろそれ以前のフッサール現象学への取り組みの意義が、それまで以上に重要視されるようになった。これを受け、いわゆる「デリダ以前のデリダ」に後の思想の「萌芽」を読み込もうとする研究は、これまでも多数試みられてきた。

しかし、この一見手堅い主題設定に反して本書がひととき異彩を放っているのは、著者が、ここではデリダ思想の括弧付きの「源流」を、デリダが学生生活を過ごした「場」、あるいはそこに流れ込む〈戦後フランスの知的磁場〉という、徹底した生態学的な視座から明らかにしているからである。実際、本

書の議論の多くは、カリフォルニア大学アーヴァイン校所蔵の「デリダ・アーカイヴ」の資料群の分析に当てられている。学生時代の小論文の類から、講師として授業を行なった際の学生宛のコメントに至るまで、実に膨大な資料の中から、デリダが当時いかなる交友関係やコミュニティに属し、またいかなる政治的な力関係のなかで自らの思想を紡ぎ出していったのかを丹念に紐解く本書の試みは、まさに「労作」という言葉が相応しい。

とはいえ、このいささか還元主義的ともとられかねない本書のアプローチが、単に哲学者の隠れた実生活を暴き、その思想の射程を時代的な文脈に制限することを目指すものではないことは指摘しておくべきだろう。むしろ本書の企ては、それ以前の「デリダ研究」に対して著者が抱く一つの疑問を反映している。一言で言うと、それはデリダを読むことにおける「歴史」という眼差しの背景化である。

「序文」で著者は、デリダの歴史、すなわちジャック・デリダという一人間が経験したであろう個人的な出来事や歴史的背景を思想の理解に持ち込むことについて、「[デリダの] 注釈者たちの多くは、まさしくこのアプローチを彼の思想への裏切りとみなすであろう」（9 頁）と述べている。実際、デリダの哲学がしばしばテキスト批評の理論として紹介されてきた歴史が示すように、彼の哲学には、たしかにテキストの潜在力を事実上の作者の「生」から切り離して評価するという方向性がある。むしろ、このことがすぐさま安易な「作者の死」や解釈の相対主義を意味するものではないことは、デリダ自身が様々場所で強調するところであるが、いずれにせよ、この一種のテキスト主義を隠れ蓑にして、注釈者がデリダのエクリチュールのみを聖典化し、彼自身が必ずしも公に語ったわけではない「歴史」を抹消して思想の「一貫性」や「転回」を議論することは、むしろデリダに関する諸々の「神話」（10 頁）を生み出すことでしかないという。「[...] 歴史的な変化を否認し、デリダの思想をそのコンテキストから遠ざける強い傾向は、むしろ彼が〈哲学の形而上学的理解〉とみなしたであろうものに属する」（11 頁）。こうした強い問題意識に基づき、いわばあまりに脱 - 主体化されたデリダのエクリチュールに対し、あえてデリダという一人間の痕跡を——テキストに宿る「亡霊」として——逆照射しようとする本書の試みは、ある意味で、デリダを読むことの「(不) 忠実さ」とは何かという問題を本質的に問いただそうとするもののように思われた。

それでは、実際に本書の内容を見てみよう。もっとも、上で述べたように、本書の議論の多くは著者が直接収集した未刊行の資料群に基づき行なわれているため、原資料へのアクセス事情の観点からしても、著者のテキスト解釈の妥当性や資料選択の正当性について、ここで評者が十分な批判的検討を行なうのは難しい。したがって以下では各章の内容を簡単に振り返りつつ、いくつかコメントを加えていくことにしたい。

本書は全体として二部構成となっており、基本的には上の対象区分を年代ごとに分析していくという手法がとられる。なかでも「ポスト実存主義者デリダ」と題された第一部は、上記の著者の問題意識がもっとも現れるパートと言えよう。一般的な理解として、60年代のデリダの著作は、いわゆる「実存主義」から「構造主義」へといった思想史的な文脈のなかで、これら先行世代に対する一つの批判的応答の仕事（「ポスト構造主義」）として位置づけられることが多かった。むしろ、この見取り図自体が間違っているとはいえないものの、著者によれば、この「大きな物語」ではこぼれ落ちるもう一つの「歴史」が存在する。それがこの「ポスト実存主義者」としてのデリダの歴史である。若きデリダがサルトル

ルに陶醉していたことはすでに自伝やインタビューなどを通じて知られているが、本書ではさらに、デリダが学生時代に深く影響を受けたというキリスト教実存主義思想との関係が強調される。

第一章では、まず戦後フランス思想界の主要な論争や力関係の変遷が概観される。とりわけ「ヒューマニズム」の理念をめぐる、 Kommunismus とカトリック勢力の対立とサルトル型の無神論的実存主義の間の緊張関係、さらにはこうした文脈を経て、フッサールとハイデガーの著作が専ら〈主観性の現象学的存在論〉として受容されていく知的磁場の形成に焦点が当てられる。そして、上記の知的風土のなかで学生時代を過ごしたデリダの思想形成の一端が、第二章では「デリダのキリスト教実存主義」として分析される。ここでは、あらゆる試論に「サルトル的語彙」(50 頁)が頻出するほどサルトルに熱狂していたデリダが、後にパリのルイ＝ル＝グラン高校準備学級でエティエンヌ・ボルヌの指導を受ける過程で、徐々にガブリエル・マルセルやシモーヌ・ヴェイユらの実存主義思想に傾倒していく様子が、当時の小論文の読解から明らかにされる。もっとも、本章では必ずしもデリダが直接言及していない著作や思想との関係が主題の類似点等から間接的に示される論述も少なくなく、デリダがここで紹介される思想をどれだけ意識的に取り入れていたのかについては、さらに踏み込んだ検討が必要となるだろう。とはいえ、当時のデリダが、サルトル的な徹底した「実存」の方向性から徐々に距離を取り、しかながら素朴な観念論や形而上学に頼ることなく超-経験的なものの可能性を思考しようとする第三の道を、「実存的スピリチュアリズム」(65 頁)あるいは「準-解決不能な経験」(79 頁)といった語彙のもと模索していたという本章の指摘は、この時期のデリダの関心と、後の「準-超越論性」の問いや「亡霊論」との関係を考える重要なヒントを与えてくれる。

続く三つの章では、デリダが高等師範学校に入学し、研究の対象が徐々にフッサール現象学に関する専門的な題材に移り変わっていく過程が、当時の高等師範学校で関心を集めていた主要な知的モードとの比較を通じて分析される。第三章では、まず高等師範学校の歴史とフランスにおけるその位置づけが概観されたのち、デリダ在学時における「ノルマリアン」の生活事情が詳細に紹介される。本章では直接デリダに関する言及は少ないものの、ミシェル・セールなどデリダと同世代の高等師範学生たちが当時共有したであろう風俗・慣習に関する情報が非常に充実しており、20 世紀フランス思想に関心のある者はこの章を独立して読んでも学ぶことが多いだろう。

第四章では、デリダの修士論文『発生の問題』に焦点が当てられる。具体的には、まず表題の「発生 (genèse)」という語彙をめぐる、デリダの主題設定が、ピアジェの「発生的認識論 (genetic epistemology)」や後期フッサールにおける超越論的発生論といった、当時のエコール・ノルマルにおける主要な知的トレンドの文脈に置き直される。より直接的には、後期フッサールにおける超越論的意識の「構成するもの」と「構成されるもの」のアポリアを「弁証法」として読み解こうとするカヴァイエスやタオの仕事、およびレヴィナスやリクールらの先行研究の意義が強調される。もっとも、ここで挙げられた思想家との関係については、すでにデリダ自身が『発生の問題』出版時の「前書き」でその影響を認めている。むしろ本章の指摘で特筆すべきは、著者が『発生の問題』の記述に再びマルセルやキルケゴールらの実存主義思想の残滓を読み込んでいる点であろう。著者は『発生の問題』以前に書かれたいくつかの小論を取り上げつつ、当時のデリダの議論に、マルセルの『存在と所有』(1935)における「問題 (problème)」と「神秘 (mystère)」の区別への暗黙の参照が見られることを指摘する。そして同様の視点が、『発生

の問題』においては、「始原的なものと根源的なものとの神秘的で原初的な弁証法」(Jacques Derrida, *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF, 1990, p. 20. 強調は引用者) という、現象学的還元がはらむ本質的なアポリアの問いとして受け継がれているという。また、続く第五章では、デリダが『幾何学の起源』の序文で言及するフッサールの「神」の概念へと焦点が移され、同書の議論が、フッサール現象学を科学性・客観性の哲学として再読するコミュニズムの派閥と、ハイデガー存在論をラディカルな神学として解釈するキリスト教の派閥という、同じく当時の高等師範学校における支配的な解釈様式の「狭間」で生まれた産物として位置づけられる。

続く第二部は「現象学と構造主義のあいだで」と題されており、ここではデリダが狭義の現象学に関するテキストから徐々にソシュールやレヴィ＝ストロースらの構造主義の諸テキストへと議論を拡張させていく、60年代中盤までのテキストが扱われる。

第六章ではデリダの「差延」概念に焦点が当てられ、初出のテキスト(「吹き込まれ掠め取られる言葉」(1965))ではさほど重要な意味が与えられていたわけではなかったというこの語が、いかにしてデリダの戦略素として形成されていったのか、その過程が、ハイデガーの「存在論的差異」やフロイトの無意識のエコノミー論、さらには同時期に高等師範学校で影響力を強め始めたラカン派精神分析との関係から読み解かれる。上で挙げた諸理論は、いずれもデリダの哲学を理解する上では欠かせないビッグ・ネームばかりだが、本章の独自性は、なんといってもこれらとの関係を、デリダ自身による原稿の各過程における訂正・手直しのプロセスにまで遡り、その内実をいっそう立体的に浮き彫りにした点にあるだろう。

第七章は、デリダの哲学が同時に彼の教育の実践でもあったことを明らかにする、本書でもっともスリリングな章の一つである。苦勞の末、デリダはフランスの中等・高等教授資格試験(アグレガシオン)を56年に合格し、64年からは高等師範学校で受験準備学級を担当している。そしてその際に彼に求められたのは、他ならぬこの試験で要求される、古典的な哲学への「徹底的かつ手堅い注釈」と「「独自」の読解」という「二つの要素」(237頁)を同時に表現する技法を、学生たちに授けることであったという。過去の留保なき遺産相続とそれを散種させる新しい読解の発明——これはデリダの脱構築の基本的な戦略であるが、いわばその一つのルーツが、この「アグレガシオンへの要請」(243頁)というあまりに人間的な、しかしながら彼の人生において決して無視できない一つの経験に深く根ざしているというのである。本章では実際にデリダが学生に施した指導の内容が紹介されているが、とりわけ学生たちが「各哲学をその総合的な契機や結論から引き出すばかりで、それ自体を生み出す言説のはたらきから少しも引き出していない」(239頁、強調は引用者)と窘める彼のアドヴァイスは、まさしくデリダの脱構築の技法それ自体の「教え」でもあったかもしれない。いずれにせよ、本章の議論は、後に展開される「条件なき大学」論にも通じる、デリダ哲学における「教育」の重要性を改めて考えさせるものとなっている。また続く第八章でも、この「教育」の「場」としての高等師範学校の特異性という眼差しは引き継がれており、ここではとりわけ『グラマトロジーについて』におけるソシュール論、レヴィ＝ストロース論が、当時デリダが交流を深めていたアルチュセールとその学生たちとの、緊張に満ちた対話関係というコンテキストのもとで再解釈される。

以上、ここまで限られた紙幅で本書の概要を辿ってきた。各章が提示する情報の量はとにかく膨大

であり、個別に言及される史実や論点も、単に資料的な価値としてというより、従来共有されてきた「デリダ」像に本質的な問いを投げかける示唆的なものばかりである。

こうした本書の画期性を認めつつ敢えて気になった点をいくつか挙げるとすれば、それはやはり、本書が描く「若きデリダ」における「文学」の不在であろう。むろん、この点については「他の箇所でも十分に扱われてきた」（13頁）と「序文」で断られているように、著者としては、本書のアプローチゆえに自覚的にこれを省略したのだろう。とはいえ著者自身、第六章の一節ではデリダの「エクリチュール」概念の各時期における異同に注目しその重要性を強調しているように（198頁）、やはり「文学＝文字 (lettre)」に関するデリダ独自の関心ないし想像力という問題は、「若きデリダ」の思想形成を考える上では重要な問いとして残るだろう。また、これは上記の点とも関わることだが、本書を通じて、著者はたしかに、デリダが同時代に流行する思想や解釈様式をいかに巧みに自らの議論に取り入れたのかについて、一定の説得力をもって描き出してはいる。しかし、それゆえにこそ疑問として問いたいの、それではそもそもデリダ自身の「問い」や「関心」はいったいどこにあったのか、という問題である。たしかに「第一部」では、「デリダの思想はフランスのキリスト教哲学の文脈のなかで理解可能である」（5頁）という目論見のもと、「ポスト実存主義者」という一つのデリダ像が掲げられてはいる。とはいえ、章が進むにつれてこのキリスト教思想や実存主義思想に関する分析は徐々に後景化していき、本書が扱う60年代中盤までのデリダの思想において、これらの思想の影響がどれほどの位置を占めていたのかについては、率直に言って、あまりはっきりとした結論が示されていないようにも思われた。

ただし、言うまでもなくこれらの指摘はいずれも本書の成果ゆえに立ち開かれた問いである。むしろこうした無数の問いの出発点として、本書が、これからデリダの「歴史」を知ろうとする者が繰り返し参照し続けることになるであろう一冊であることは、強調してもし過ぎることはないだろう。